他者の行動予測における主観的経験の利用

織田 涼 八木 保樹 立命館大学

The use of subjective experience in the prediction of others' behavior

Ryo Orita and Yasuki Yagi (*Ritsumeikan University*)

The present research investigated the role of experienced ease of retrieval in predicting future behavior of others. People retrieve past examples of others' behavior to predict how they would behave in the future. But well-defined, high trait evaluations about others decrease the informational value of the retrieved content. In this case, people may base their predictions on the ease or difficulty which they experienced during the retrieval of examples. In two experiments, participants were asked to think of an acquaintance who they evaluated as being assertive or less assertive. The trait evaluations were manipulated by using different experimental instructions (Experiment 1) or using measured trait evaluation scores (Experiment 2). Then, participants retrieved one (easy) or four (difficult) past examples of the acquaintance's behavior. In the case of an assertive acquaintance, participants predicted a higher likelihood of assertive behaviors after retrieving one example than after retrieving four examples, whereas in the case of a less assertive acquaintance the reverse was true. These results suggest that subjective experiences can have informational value even when making predictions of others' future behavior.

Key words: ease of retrieval, subjective experience, prediction, trait evaluation.

The Japanese Journal of Psychology
2010, Vol. 81, No. 5, pp. 510-516

人物の過去の行動事例は符号化され、その人物の性格特性や態度の評価、および将来の行動の予測といった様々な対人判断において検索され参照される。対人判断では、行動事例の内容や数が主な根拠になると考えられてきた (Higgins, 1996)。他方で、事例検索のような情報処理に伴う主観的経験もまた、情報として利用されることがある。本研究は、この主観的経験の利用の一つである検索容易性効果 (Schwarz, Bless, Strack, Klumpp, Rittenauer-Schatka, & Simons, 1991) に焦点を当てる。そして、これまで主観的経験が利用されないとされてきた他者判断においても、検索容易性効果が生じ得る可能性を検討する。

例えば、自己の過去の積極的行動を 6 個検索した場合よりも 12 個検索した場合に、人は自己をそれほど積極的ではないと評価する (Schwarz et al., 1991)。これは、検索する事例数の増加がもたらす困難さの主観的経験が、当該の事例の頻度の低さを意味する手掛か

りとして利用されるからである (Aarts & Dijksterhuis, 1999)。対人認知の先行研究は、事例検索に伴う主観的経験が、検索した事例の内容や数よりも、情報としての価値 (診断性) を高く有し、種々の判断に利用されることを示しており、これを検索容易性効果という (Schwarz, 1998)。

しかしながら、全ての対人判断において主観的経験の診断性が高いわけではない。特に、他者が対象となる対人判断では検索容易性効果が生じないと主張する研究がある。この主張について Raghurir & Menon (2005) は、期待された経験と実際の経験との差異という観点から説明した。人は自分自身をよく理解していると考えるが、他者をよく理解しているとは考えないと推察される。したがって、自己の行動事例の検索は容易であり、他者の事例検索は困難であると期待されるだろう。つまり、検索する事例数の増加によって実際に経験する困難さは、自己判断における期待とは一致しないが、他者判断における期待とは一致する。Raghurir & Menon (2005) は、主観的経験が情報として利用されるのは、その経験が先行する期待と一致しない場合に限られるとした。そのため、期待と実際とが一致しない自己判断においては、主観的経験の診

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryo Orita, Psychology Laboratory, Ritsumeikan University, Tojiin Kitamachi, Kita-ku, Kyoto 603-8346, Japan (e-mail: lt109020@ed.ritsumeikan.ac.jp)

断性が高い。しかし、期待と実際とが一致する他者判断においては、相対的に主観的経験の診断性が低く、事例内容の診断性が高いと主張した。この Raghbir & Menon (2005) の主張を支持する実験結果を、Caruso (2008) が示している。この実験では、他者の積極的な行動事例を 2 個検索した場合よりも 8 個検索した場合に、参加者は他者を積極的であると評価した。この結果から Caruso (2008) は、他者判断では事例の内容や数の利用が“標準的選択”であると主張した。

Raghbir & Menon (2005) および Caruso (2008) の研究は、他者判断においては行動事例の内容および数の診断性が主観的経験よりも一般に高いことを示している。しかし、行動事例の診断性の高さは不変ではない (Budesheim & Bonnelle, 1998)。行動事例の診断性が低下すれば、検索に伴う主観的経験の診断性が相対的に高くなると考えられる。そういった場面では、他者判断においても検索容易性効果が生じるだろう。

本研究では、他者の行動事例の診断性を低下させる要因として、対象他者への人格特性の評価の明確さに着目した。明確な特性評価が行動事例の診断性を低下させることで、主観的経験の利用が生じるという過程が、他者判断の一種である他者の行動予測において見られると考えられる。この仮説は、以下に説明する Srull & Wyer (1989) と、Maass, Cadinu, Taroni, & Masserini (2006) の知見に基づいて立てた。

他者の行動予測では、対象他者に関わる情報を集約した対人表象が利用される (Ross & Nisbett, 1991)。Srull & Wyer (1989) の対人記憶理論によれば、対人表象の中で行動事例は、その事例が含まれる人格特性を中心として体制化される。特性は事例内容の要約として機能し、行動事例よりも上位の役割を担う。したがって、要約である特性についての明確な評価があると、下位に位置する行動事例の診断性は低くなる。その一方で、特性評価が明確でない場合には、行動事例の診断性が低下しないため、その内容や数に基づいた判断が生じる (Budesheim & Bonnelle, 1998)。明確な特性評価が行動事例の診断性を低下させるのであれば、事例検索に伴う主観的経験の診断性は相対的に顕著になり、後続の判断に利用される可能性がある。

ただし、Srull & Wyer (1989) の理論では、要約である特性評価が明確であれば、人はその評価に基づいて判断するとされる。この場合、診断性が低下した行動事例は、検索されない可能性が考えられる。困難さの経験は事例検索に伴う。明確な特性評価が事例内容の診断性を低下させても、事例検索が生じなければ、結局のところ、主観的経験は利用されないことになる。

しかし、Maass et al. (2006) の知見から、他者の行動予測においては、特性評価が明確であっても、行動事例の検索が生じると考えられる。対人表象や特性

と行動に関する社会的知識の構造上、一つの特性は複数の異なる行動事例と結びつく。したがって、具体的な行動事例から対応する抽象的な特性を帰納的に推論することは容易だが、抽象的な特性から特定の行動だけを演繹的に予測することは難しい。Maass et al. (2006) はこの可能性を検討し、行動を予測する課題目標が与えられても、人は他者の特性評価に基づいた予測を行わないことを示した。そして、行動予測では予測する行動に類する過去の行動事例の検索が、代替的に生じると主張している。

Srull & Wyer (1989) と Maass et al. (2006) の知見を統合すると、他者の行動予測では対象他者の行動事例が検索されるが、その事例内容の診断性が、特性評価の明確さによって規定されると予想される。特性評価が明確でない場合、事例内容の診断性は高いだろう。しかし特性評価が明確な場合、検索される事例内容の診断性は低くなると考えられる。

検索容易性効果は、事例内容と主観的経験が持つ診断性の相対的な高さに依存する (Schwarz, 1998)。他者判断において事例内容の診断性が不変的に高いのであれば、他者の行動予測においても検索容易性効果が生じないかもしれない。しかし、特性評価が明確な他者においては、事例内容の診断性が低くなり、相対的に事例検索に伴う主観的経験の診断性が高くなるだろう。つまり、特性評価の明確な他者の行動予測は、主観的経験に基づいて形成されると考えられる。他方で、特性評価が不明確な他者では、行動事例の内容の診断性が高いので、事例内容に基づいた行動予測が形成されると考えられる¹。本研究では、他者の将来における積極的行動の見込みを予測させる課題を用いて、この仮説を検証した。

実 験 1

実験 1 では、積極性の特性評価が高く明確な他者を対象とする場合 (高条件) と、特性評価が不明確な他者を対象とする場合 (中性条件) とを、教示によって操作した。さらに、その他者の過去の行動事例のうち、積極的な行動を少数 (1 個) もしくは多数 (4 個) 検索するよう求めた。事例検索の後に、その他者が将来において積極的な行動を取る見込みを予測させた。

¹ Bower & Gilligan (1979) は、自己表象もまた、特性を中心とした行動事例の体制化がなされると主張している。したがって、自己判断においても、明確な特性評価が行動事例の診断性を低下させるかもしれない。しかし、行動事例を含む自己表象に特性が関連しないとする知見もある (Kihlstrom & Klein, 1994)。また Schwarz et al. (1991) の結果から、自己判断では、事例内容よりも主観的経験の診断性が高いと言える。このことから、明確な特性評価が事例内容の診断性を低下させるか否かにかかわらず、事例検索を伴った自己判断では、主観的経験が利用されると考えられる。

行動事例数は予備実験の結果に基づいて決定した。41 名の参加者に、特定の知人の積極的行動を思いつく限り記述させた結果、平均で 2.9 個 ($SD=1.8$) の行動事例が検索された。この結果から実験 1 および 2 での行動事例の検索数を 1 個および 4 個の水準を設定した。また、記述された積極的行動を分類し、生起率を求めた。この生起率の上位 3 行動を、将来における積極的行動の予測項目とした (生起率の高い順に、“初対面の人でも進んで話しかける” (65%)、“公の場面でも自分の意見をしっかりと主張する” (30%)、“集団のまとめ役を担って、進んで仕事をする” (25%))。

方 法

実験計画と参加者 実験 1 は 2 (特性評価: 高, 中性) $\times$ 2 (行動事例数: 1 個, 4 個) の参加者間 2 要因計画であった。大学生 40 名 (男性 13 名, 女性 27 名, 平均年齢 21.2 歳, $SD=6.4$) を対象とし、各群に 10 名ずつ割り当てた。実験は室内で個別に実施した。

手続き 参加者に知人を 1 人挙げ、その人物のイニシャルを記入するよう求めた。その際、特性評価の高条件では“積極的だと思う知人”, 中性条件では“積極的とも消極的とも思わない知人”を挙げるように教示した。

特性評価要因の操作確認として、知人の特性評価を求めた。この評価は“消極的-積極的”を含む六つの単語対の項目に対して、知人が当てはまりの程度を 10 段階評定で回答させた (その他の項目は、親切-不親切, 神経質-おおらか, 器用-不器用, 優柔不断-決断力がある, 誠実-いいかげん)。分析対象となる“消極的-積極的”項目では、得点が高いほど、積極性に関する知人への特性評価が明確であることを意味した。

続いて、その知人が過去に取った積極的な行動事例を検索して記述するように求めた。参加者の半数は事例数を 1 個とし、残りの半数は 4 個とした。

その後、知人を対象とする行動予測を求めた。予備実験で決定した積極的な 3 行動を含む 12 行動について、知人が将来にその行動を取る見込みの高さの評定を求めた (その他の行動は、“お化け屋敷に行けば泣いてしまう”, “テスト前になると猛勉強する” など)。“見込みが低い (1)”から“見込みが高い (10)”までの評定とした。

最後に、事例数要因の操作確認として、事例検索の困難さの程度を評価するように求めた。“容易 (1)”から“困難 (10)”までの 10 段階評定での回答とした。全ての回答を行った参加者に、実験の目的と感謝の意を伝え、実験を終了した。

結 果

人格特性の評価 “消極的-積極的”項目の評価値を対象として、特性評価 (2) $\times$ 事例数 (2) の 2 要因分

散分析を行った。特性評価の主効果のみが有意であり ($F(1, 36)=93.7$, $partial\eta^2=.72$, $p<.001$), 高条件 ($M=8.9$) の参加者が中性条件 ($M=5.3$) の参加者よりも、知人を積極的であると評価した。

困難さの評価 困難さ評価を用いた 2 要因分散分析では、事例数の主効果 ($F(1, 36)=5.7$, $partial\eta^2=.14$, $p<.05$) および特性評価の主効果 ($F(1, 36)=5.1$, $partial\eta^2=.13$, $p<.05$) のみが有意であった。4 個条件 ($M=7.3$) の参加者は 1 個条件 ($M=5.3$) の参加者よりも困難さを強く経験した。また中性条件 ($M=7.2$) の参加者は高条件 ($M=5.3$) の参加者よりも困難さを強く経験した。

行動予測 積極的な 3 行動の予測項目から高い信頼性が得られたため ($\alpha=.81$), 3 項目の平均得点を積極的行動の予測指標とした。Figure 1 は条件別の平均値および標準偏差を示す。2 要因分散分析の結果、特性評価の主効果が有意であった ($F(1, 36)=31.2$, $partial\eta^2=.46$, $p<.001$)。高条件 ($M=7.3$) の参加者は中性条件 ($M=4.4$) の参加者よりも積極的行動の見込みを高く予測した。また、仮説の検討に関わる 2 要因の交互作用は有意であった ($F(1, 36)=7.9$, $partial\eta^2=.18$, $p<.01$)。事例数要因の単純主効果は特性評価の高条件において有意であり ($F(1, 36)=7.9$, $partial\eta^2=.18$, $p<.01$), 中性条件では有意ではなかった ($F(1, 36)=1.3$, ns)。高条件の参加者は、4 個条件より 1 個条件で、積極的行動の見込みを高く予測した。事例数の主効果は有意ではなかった。

相関分析 仮説の更なる検討として、事例検索に伴う困難さの経験と予測との関連を調べることが有効である (Schwarz et al., 1991)。そこで、特性評価の条件ごとに、事例検索時の困難さの評価と積極的行動の予測指標との相関係数を求めた。特性評価の高条件では、事例検索の困難さが強いほど積極的行動の見込みが低

Figure 1. Means of likelihood estimations for assertive behaviors in Experiment 1. Error bars represent SDs.

く予測されるという負の相関が示された ($r = -.55$, $p < .05$)。中性条件では有意な相関は示されなかった ($r = -.07$, ns)。

考察

予測指標の群間比較の結果および、予測と困難さの経験との相関分析の結果は、本研究の仮説を支持した。積極性の特性評価が明確な他者の行動予測には、事例検索に伴う主観的な経験が利用された。他方で、特性評価が不明確な他者では、主観的経験は利用されなかった。この結果は、他者の行動予測において、明確な特性評価が検索した事例内容の診断性を低下させ、検索容易性効果をもたらすという仮説を支持する。

一方でこの結果は、対象となった知人との親密性の違いからも説明できるかもしれない。実験1では、特定の特性評価を持つ知人を対象にするよう、予め教示を与えた。特性評価を含む対人表象は、対象他者との相互作用を通して形成される (Srull & Wyer, 1989)。したがって、明確な特性評価を持つ他者を対象とさせる教示は、その明確な評価を持てるほどに豊富な相互作用のある親密な他者を対象とするよう参加者に促した可能性がある。

他者に対する親密さの変化は、対人判断の際に利用する情報に違いをもたらす (Idson & Mischel, 2001)。親しくない他者に対しては、既存の知識や表象に基づく判断が生じる。しかし親しさが増すほど、その時々で利用可能な情報に基づいた、すなわち文脈依存的な判断が生じる (McAdams, 1994)。検索される行動事例の内容は、過去に符号化された既存の対人表象である。他方で、検索に伴う主観的経験は、検索時に利用可能となる文脈依存的な情報である。したがって、特性評価の高条件の参加者は、過去の相互作用が豊かな親しい他者を対象とした結果、文脈依存的な主観的経験を利用したのかもしれない。一方で、中性条件の参加者は、明確な特性評価を持つほどには親密ではない他者を対象としたために、検索した事例内容を利用した可能性がある。

この可能性を検討するためには、親密性に影響し得る教示操作を行わない場面で、結果の再現性を確認する必要がある。さらに、対象他者との親密性を表す指標として、付き合いの長さや親しさの程度を測定することが有効であろう。実験2ではこれらの点を変更し、実験1の結果が再現されるかどうかを検討した。

実験2

方法

実験計画と参加者 実験2は、事例数 (1個, 4個) のみの1要因実験計画であった。専門学校生および大学生 48名 (男性 14名, 女性 34名, 平均年齢 20.1

歳, $SD = 2.0$) を対象とし、事例数要因の各条件に無作為に割り当てた。このうち8名は質問項目への回答に欠損が見られたため、分析から除外した。

手続き 任意の知人を1人挙げ、その人物のインシヤルを記入するように求めた。実験1とは違い、積極性の特性評価を操作する教示は行わなかった。また、その知人と知り合いである期間 (年月単位) と、その知人に対する親しさの程度 (“全く親しくない (1)” から “とても親しい (10)” まで) の回答を求めた。

次に、知人に対する特性評価、および知人の積極的行動事例の検索を実験1と同じ手続きで求めた。事例数要因の操作として、検索事例数は1個もしくは4個とした。

その後、行動予測および事例検索の困難さの評定を、実験1と同じ手続きで求めた。これらを済ませた参加者に、実験の目的と感謝の意を伝え、実験を終了した。

結果

人格特性の評価 全参加者の “消極的-積極的” 項目での評価値の中央値は $Me = 6$ であり、この値を基準にして参加者を2群に分けた。中央値より高い評価を示した参加者を特性評価の高条件 ($M = 8.4$, 事例数の1個条件が9名, 4個条件が10名) とし、中央値以下の参加者を中性条件 ($M = 4.3$, 1個条件が11名, 4個条件が10名) とした。その上で、この評価値を対象とした特性評価 (2) $\times$ 事例数 (2) の2要因分散分析を行った。特性評価の主効果のみが有意であり ($F(1, 36) = 128.2$, $partial\eta^2 = .78$, $p < .001$)、条件間で積極性の評価が異なることを示した。

困難さの評価 事例検索の困難さ評価を対象とした2要因分散分析では、事例数の主効果のみが有意であった ($F(1, 36) = 6.3$, $partial\eta^2 = .14$, $p < .05$)。4個条件 ($M = 6.7$) の参加者は、1個条件 ($M = 4.2$) の参加者よりも困難さを強く経験した。

行動予測 実験1と同様に、積極的行動に該当する3項目の平均得点を予測指標とした ($\alpha = .52$)²。Figure 2は予測指標の条件別の平均値および標準偏差を示す。予測指標における2要因分散分析では、特

² 実験2では、3行動の予測項目から高い信頼性が得られなかった。そこで項目別に2要因分散分析を行った結果、全ての項目で交互作用が有意であった ($F_s > 5.7$, $ps < .05$)。3項目ともに、特性評価の高条件では、事例数の単純主効果が有意傾向にとどまった ($F_s > 3.3$, $ps < .08$)。明確な差が認められないものの、1個条件が4個条件よりも高い予測を示した。中性条件では “初対面の人でも進んで話しかける” の予測項目でのみ、4個条件が1個条件よりも高い予測を示した ($F(1, 36) = 7.2$, $p < .05$)。この結果は、特に高条件において、3項目の平均得点を用いた分析と類似している。そこで実験2では、実験1との整合性も加味し、平均得点を用いた分析結果を用いた。

性評価の主効果が有意であった ($F(1, 36)=14.0$, $partial\eta^2=.28$, $p<.001$)。特性評価の高条件 ($M=6.3$) の参加者は中性条件 ($M=4.4$) の参加者よりも、積極的行動の見込みを高く予測した。また、2 要因の交互作用は有意であった ($F(1, 36)=18.2$, $partial\eta^2=.34$, $p<.001$)。特性評価の高条件では、事例数の 1 個条件 ($M=7.4$) の参加者が 4 個条件 ($M=5.3$) の参加者よりも、積極的行動の見込みを高く予測した (事例数の単純主効果, $F(1, 36)=9.6$, $partial\eta^2=.21$, $p<.01$)。中性条件では、4 個条件 ($M=5.5$) の参加者が、1 個条件 ($M=3.4$) の参加者よりも、積極的行動の見込みを高く予測した ($F(1, 36)=8.7$, $partial\eta^2=.19$, $p<.01$)。事例数の主効果は有意ではなかった。

相関分析 実験 1 と同様に、特性評価の各条件で困難さの評価と予測指標との相関係数を求めた。特性評価の高条件では、事例検索時の困難さと予測指標との間に負の相関が示された ($r=-.53$, $p<.05$)。中性条件では、有意な相関が示されなかった ($r=-.08$, ns)。

親近性 知人と知り合いである期間 (月単位に換算) および親しさの評価を個別に対象とした特性評価 × 事例数の 2 要因分散分析では、有意な効果が示されなかった ($F_s<3.2$)。特に、特性評価の条件間において違いがなく、知人への特性評価の違いは親近性に影響しなかった (高条件で $M=97.2$ (期間) と $M=9.3$ (親しさの評価), 中性条件で $M=83.0$ (期間) と $M=9.3$ (親しさの評価))。

考 察

実験 2 では、実験 1 の結果に対する親近性から考えられた代替説明を排除するための検討を行った。すなわち、実験 1 で用いた特性評価の教示操作には、対象

他者への親近性に違いをもたらした可能性があった。この親近性の違いが、事例内容と主観的経験の利用を規定したのかもしれない。しかし、この特性評価の教示操作を用いなかった実験 2 でも、行動予測において実験 1 と同様の結果が得られた。また、知人との知り合いである期間および親しさの評価に条件間での違いが示されなかった。したがって、行動予測における検索容易性の有無は、親近性の違いに帰するものではなく、特性評価の明確さによる事例内容の診断性的変化に帰するものであると言える。

総 合 考 察

本研究では、他者の行動予測という対人判断課題を用いて、行動事例の検索に伴う主観的経験が利用される検索容易性効果 (Schwarz et al., 1991) について検討した。他者を対象とした対人判断では、事例検索に伴う主観的経験は利用されないとされてきた (Caruso, 2008; Raghurir & Menon, 2005)。これは、他者判断においては検索した事例内容の診断性が高く、検索時の主観的経験の診断性が相対的に低いことによる。しかし、対象他者への特性評価は行動事例の診断性に影響する (Srull & Wyer, 1989)。特性評価が明確な他者の場合には、検索する事例内容の診断性が低い。ため、事例検索時の主観的経験が利用されると考えられた。他方で、特性評価が明確でない他者の場合には、診断性の高い事例内容に基づく予測が生じるという仮説を立てた。

二つの実験結果は共に、これらの仮説を支持した。すなわち、積極性の特性評価が明確な場合のみ、積極的行動事例の検索数が多いほど、積極的行動の見込みを高く予測した。さらに、事例検索時に困難さを強く経験するほど、積極的行動の見込みを高く予測する負の相関関係がみられた。これらの結果は、先行研究の主張と一致せず、他者判断においても検索容易性効果が生じ得ることを示している。検索時の困難さを含む、認知処理に伴った主観的経験の情報機能について検討する際には、特性評価の明確さといった、他者に関わる情報の影響を考慮する必要があると考えられる。

実験 2 では、対象他者との親近性の違いからの代替説明を検討し、これを否定する結果が得られた。しかし、両実験で得られた行動予測の結果は、Raghurir & Menon (2005) の主張した、期待と実際の経験の差異という視点からも代替説明が可能かもしれない。二つの実験において、明確な特性評価を持たない知人の積極的行動の検索を求められた中性条件の参加者は、事例検索が困難であると事前に期待したかもしれない。一方で、積極的と評価される知人を対象とした高条件の参加者は、積極的行動の検索が容易であると期待した可能性がある。4 個の事例検索によって実際

Figure 2. Means of likelihood estimations for assertive behaviors in Experiment 2. Error bars represent SDs.

に生じる困難さの経験は、高条件での期待と一致しないが、中性条件での期待とは一致する。逆に1個の検索による容易さの経験は、高条件での期待と一致するが、中性条件での期待に一致しない。

Raghubir & Menon (2005) は、事例検索に伴う主観的経験の利用は、その経験が事前の期待と不一致になる場合に限られると主張した。またこの主張を検討した Hansen & Wanke (2008) は、事例検索に先行して、課題が容易あるいは困難であることを参加者に期待させた。続く事例検索では、態度判断のテーマに対して肯定的な主張事例を2個もしくは6個検索させ、困難さの経験を操作した。容易さを期待した後の2個の事例検索や、困難さを期待した後の6個の事例検索では、期待と実際とが一致している。この一致場面での態度判断では、2個よりも6個の検索条件で賛成の態度が強くなった。他方で、容易さを期待した後の6個の事例検索や、困難さを期待した後の2個の事例検索では、期待と実際とが不一致にある。この不一致場面では検索容易性効果が示され、6個よりも2個の事例を検索した時に、参加者は賛成の態度を強く示した。

これらの知見に従って本研究の結果を捉えると、特性評価の高条件では、事前に期待した容易さの経験と、4個の検索から生じた困難さの経験とが不一致になるため、主観的経験が利用されたのかもしれない。中性条件では、事前の困難さの期待が、4個の検索から生じる困難さと一致したために、事例内容が利用された可能性がある。

この可能性の検討として、Hansen & Wanke (2008) と同様に、一致場面および不一致場面での事例数要因の影響を分析した。まず、一致場面に該当する特性評価の高条件における1個条件と、中性条件における4個条件とを比較した。その結果、二つの実験を通して1個条件よりも4個条件で、積極的行動の見込みが低く予測された(実験1: $M=8.4$ (1個), $M=4.8$ (4個), $t(18)=5.0$, $p<.001$; 実験2: $M=7.4$ (1個), $M=5.5$ (4個), $t(17)=2.5$, $p<.05$)。この結果は、行動予測において主観的経験が利用された時のパターンと合致する。次に、期待と実際の経験の不一致場面である、中性条件における1個条件と、高条件における4個条件とを比較した。その結果、1個条件よりも4個条件において、積極的行動の見込みが高く予測された(実験1: $M=3.9$ (1個), $M=4.8$ (4個), $t(18)=-3.0$, $p<.01$; 実験2: $M=3.4$ (1個), $M=5.3$ (4個), $t(19)=-2.8$, $p<.05$)。この結果は、検索した事例内容が利用された時のパターンと合致する。以上の結果は、一致場面で主観的経験が利用され、不一致場面で事例内容が利用されていることを示し、Hansen & Wanke (2008) の結果と一致しない。したがって、本研究の予測指標の結果は、主観的経験

の期待と実際との差異から考えられる代替説明を支持しない。特性評価の違いによる、主観的経験と事例内容の相対的な診断性の高さが、検索容易性効果の有無を規定したと考えられる。

本研究は、他者判断においても主観的経験が利用され得ることを示した。しかし、その内的プロセスを示していない。近年、主観的経験に基づく判断形成の過程について、様々な議論がなされている(Tormala, Falces, Briñol, & Petty, 2007; Tormala, Petty, & Briñol, 2002)。これらは、これまで検索容易性効果が示されなかった他者判断にも当てはまるものなのか、あるいは他者判断には固有のプロセスが存在するのかについて、今後の検討が必要である。

引用文献

- Aarts, A., & Dijksterhuis, A. (1999). How often did I do it? Experienced ease of retrieval and frequency estimates of past behavior. *Acta Psychologica*, **103**, 77-89.
- Bower, G.H., & Gilligan, S.G. (1979). Remembering information related to one's self. *Journal of Research in Personality*, **13**, 420-461.
- Budesheim, T.L., & Bonnelle, K. (1998). The use of abstract knowledge and behavioral exemplars in causal explanations of behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 575-587.
- Caruso, E.M. (2008). Use of experienced retrieval ease in self and social judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 148-155.
- Hansen, J., & Wanke, M. (2008). It's the difference that counts: Expectancy/experience discrepancy moderates the use of ease of retrieval in attitude judgments. *Social Cognition*, **26**, 447-468.
- Higgins, E.T. (1996). Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience. In E.T. Higgins & A. Kruglanski (Eds.), *Social psychology: Handbook of basic principles*. New York: Guilford. pp. 133-168.
- Idson, L.C., & Mischel, W. (2001). The personality of familiar and significant people: The lay perceiver as a social-cognitive theorist. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 585-596.
- Kihlstrom, J.F., & Klein, S.B. (1994). The self as a knowledge structure. In R.S. Wyer, Jr. & T.K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Vol. 1. *Basic processes*. 2nd ed. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 153-208.
- Maass, A., Cadinu, M., Taroni, M., & Masserini, M. (2006). The induction-deduction asymmetry: Fact or artifact? *Social Cognition*, **24**, 74-109.
- McAdams, D.P. (1994). A psychology of the stranger. *Psychology Inquiry*, **5**, 145-148.
- Raghubir, P., & Menon, G. (2005). When and why is ease of retrieval informative? *Memory & Cognition*,

- 33, 821-832.
- Ross, L., & Nisbett, R. E. (1991). *The person and the situation: Perspectives of social psychology*. Philadelphia: Temple University Press.
- Schwarz, N. (1998). Accessible content and accessibility experience: The interplay of declarative and experiential information in judgment. *Personality and Social Psychology Review*, 2, 87-99.
- Schwarz, N., Bless, H., Strack, F., Klumpp, G., Rittenauer-Schatka, H., & Simons, A. (1991). Ease of retrieval as information: Another look at the availability heuristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 195-202.
- Srull, T.K., & Wyer, R.S. (1989). Person memory and judgment. *Psychological Review*, 96, 58-83.
- Tormala, Z.L., Falces, C., Briñol, P., & Petty, R.E. (2007). Ease of retrieval effects in social judgment: The role of unrequested cognitions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 143-157.
- Tormala, Z.L., Petty, R.E., & Briñol, P. (2002). Ease of retrieval effects in persuasion: A self-validation analysis. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 1700-1712.
- 2009. 6. 1 受稿, 2010. 5. 1 受理——